

観峰館 夏季企画展

# きれいな字

—近代中国と日本の書—

会期..二〇二三年七月二日(土)～九月四日(日)

会場..新館 特別展示室

## ごあいさつ

観峰館が収蔵している資料には、近代中国の官僚たちによって制作された書が多く含まれています。彼らに求められたのは、強烈的な個性を表す文字を書くことではなく、誰にでも読める伝統的な「きれいな字」、すなわち字の形が整っていて、見る者にとって快く感じられるような書風の文字を書きこなすことでした。本展では、このような近代中国の「きれいな字」を中心に展示を構成し、現代の日本人にとっても親しみやすい書の作品を紹介します。

中国で生まれ、育まれた「きれいな字」の伝統は、日本でも学ばれるものとなっています。そこで本展では、収蔵品の中から、近代日本の人々が中国の書に倣って書き上げた作品や、当時の人々が「きれいな字」の手本として用いた教科書なども、あわせて展示することといたしました。これらの作品を通して、現代に生きる私たちがどのような字を「きれいな字」と捉えているのか、見つめ直してみたいと思います。

今回の企画展では、第一部を「近代中国の書」、第二部を「日本の書」として、展示を構成いたしました。以上の展示を通して、字を「書く」機会の少なくなった現代の日本人に「書」や「習字」に親しむ機会を提供することが、本展の目的です。

## 第一部 近代中国の書

観峰館は様々な資料を収蔵していますが、それらの中で最も大きな割合を占めているのが、清時代後期〜中華民国初期頃（概ね一八〇〇年代〜一九四〇年頃）に制作された肉筆の書や絵画です。これらの資料だけでも二万点に及びます。その内、書は約三千点です。

第一部では、これらの中から、近代中国の官僚たちが楷書や行書で書いた作品と、手本を見て写した臨書作品をご紹介します。

### I. 楷書―唐の四大家に倣う―

現代でも公式書体として使用される楷書によって書かれた作品を紹介します。

中国における文字の歴史は長大で、現存最古の文字資料である甲骨文から数えても三千五百年余りの歴史を有します。楷書体は、歴史的には最も後に出来た書体です。その萌芽は6世紀頃にはすでに見ることが出来ますが、唐時代（六一八〜九〇七）に至って一つの典型を作りあげます。

そこには、「唐の四大家」と呼ばれる四人の名人、欧陽詢（五五七〜六四一）／虞世南（五五八〜六三八）／褚遂良（五九六〜六五八）／顔真卿（七〇九〜七八五）がいました。彼らの書法は、楷書体における一つの理想形として、後世の人々に参照され、倣われるものとなっています。

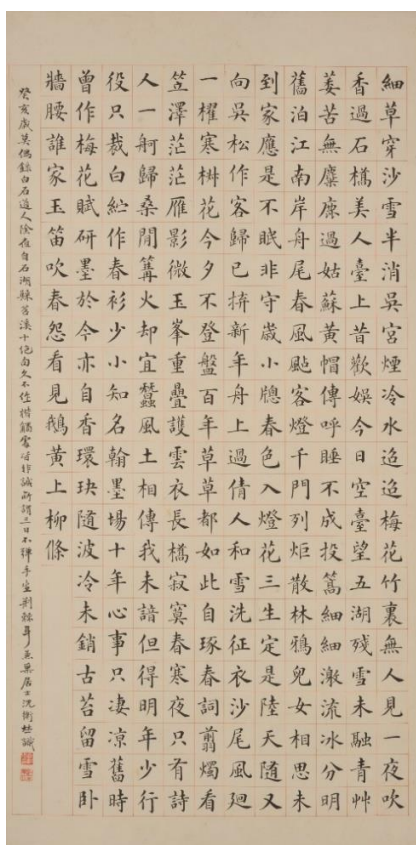
ここでは、唐の四大家に倣う楷書の作品をご紹介します。一点一面を揺るがせにしない楷書の姿をご覧ください。

1 沈衛（一八六二〜一九四五）

かいしよ きようき じよやに せきこより しょうけいにかえるしじく

《楷書姜夔除夜自石湖歸苕溪詩軸》

中華民國十二年（一九二二）



朱色の罫線が引かれた紙に、南宋時代の姜夔（一一五五〜一

二二一？）「除夜自石湖歸苕溪」を書いた作品です。一字およそ三

センチ四方で端正に書かれています。墨線に見られる肥瘦や均整

のとれた字形は、初唐の三大家や、その影響を強く受けている

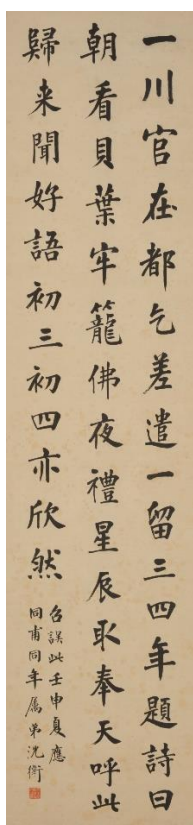
顔真卿（七〇九〜七八五）の若書きを想起させるものです。

2 沈衛（一八六二〜一九四五）

かいしよ せんかんしゅうろうへきにだいすしじく

《楷書川官題儼樓壁詩軸》

中華民國十二年（一九二二）



縦長の紙に宋の詩人・川官（生卒年不詳）の詩「題儼樓壁」  
を書いた作品です。

書き始めて筆先を丸め込むような筆法が見られます。また、横

画をやや細めに、縦画を太めに作る字の姿は、顔真卿（七〇九〜

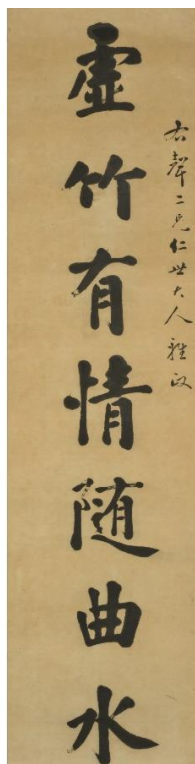
七八五）の《多宝塔碑》を想起させます。

3 黄自元（一八三七～一九一八）

かいしよしちごんついれん

《楷書七言对聯》

清時代末期～中華民国初期頃

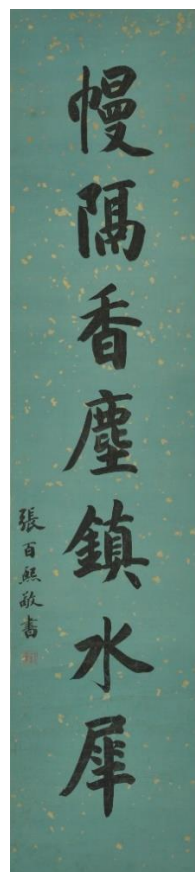
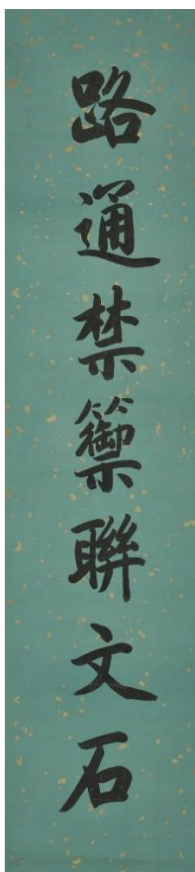


4 張百熙（一八四七～一九〇七）

かいしよしちごんついれん

《楷書七言对聯》

清時代末期～中華民国初期頃



二枚の紙に七言の対句が書かれた作品です。墨をたっぷり含んだ筆で書かれたようで、ところどころにニジミが見られます。紙に浸透した墨は丸みのある形を残しますが、一本一本の線は直線的で、文字全体の均衡を崩すことなく書き上げられています。

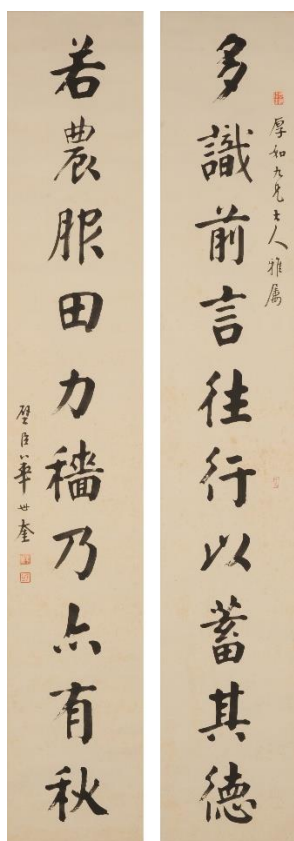
金箔を散らした青緑色の紙（冷金箋）に七言の対句を書いた作品です。過度に肥瘦をつけない柔らかい線、整った形の文字を書いています。バランスを崩さずに伸びやかな線を引きこなしている点に。筆者の力量を垣間見ることが出来ます。

5 華世奎（一八三七〜一九一八）

かいしよじゆうごんつうれん

《楷書十言對聯》

清時代末期〜中華民国初期頃



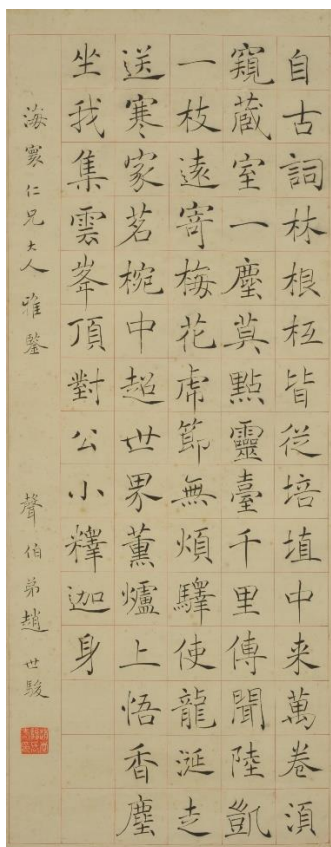
細長い紙に十文字の対句を書いた作品です。墨をたつぷりと含んだ厚みのある線が、文字全体に安定感を醸し出しています。横画に時折見える線の肥瘦やハライに表れるカスレが紙面に適度な変化をもたらしており、見る者を飽きさせません。

6 趙世駿（?〜一九二七）

かいしよそうきしじく

《楷書曾幾詩軸》

清時代末期〜中華民国初期頃



細くしなやかな線を基調とした作品です。筆先を巧みに用いて書かれています。紙には罫線が引かれていますが、それにとらわれることなく自在に筆を運んでおり、少し左へ傾斜した文字の姿には、躍動感が満ちあふれています。

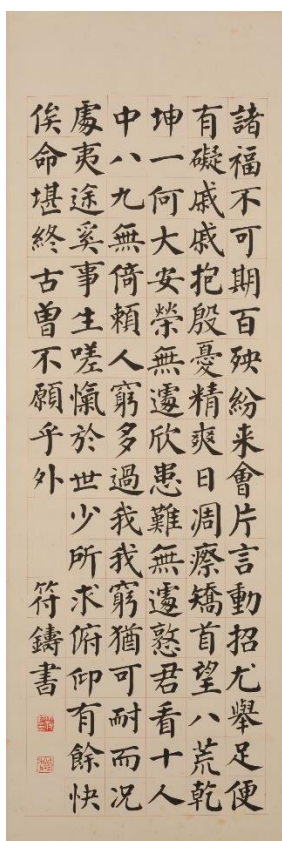


7 符鑄（一八八六～一九四七）

かいしよそうこくはんかしよくじく

《楷書曾國藩家書句軸》

清時代末期～中華民国初期頃



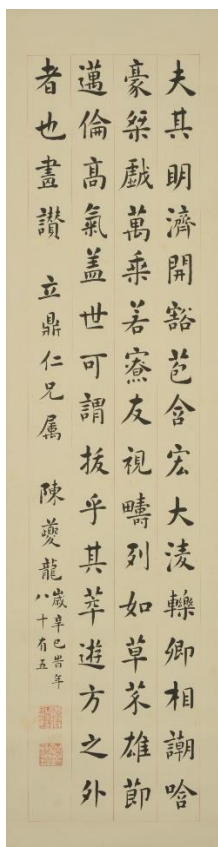
マス目に対して少し大きめの文字ですが、細身の線を用いるこ  
とで、各文字が潰れないように書き上げています。筆先を巻き込  
むようにする起筆や、燕の尾のように二股に分かれたハライな  
どは、顔真卿（七〇九～七八五）の書を彷彿とさせます。

8 陳夔龍（一八五七～一九四八）

かいしよとうほうさくがさんごじく

《楷書東方朔画贊語軸》

清時代末期～中華民国初期頃



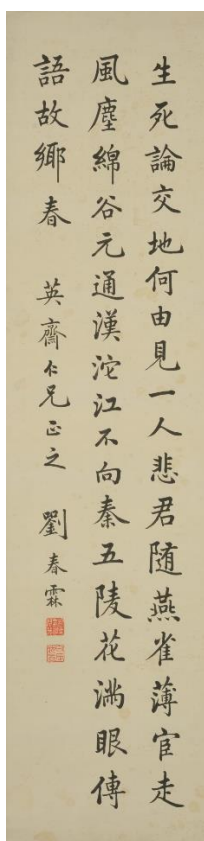
柔らかな線と、やや縦長な字形で「東方朔画贊」の文章を書い  
た作品です。点画同士が接する部分を少し離すことで文字の懐を  
大きく取り、紙面全体を明るく見せています。柔らかな線は虞世  
南（五五八～六三八）の《孔子廟堂碑》を想起させる書風です。

9 劉春霖（一八七二～一九四二）

かいしよとほしじく

《楷書杜甫詩軸》

中華民國



直線的な線を基調として書かれた作品です。一部、点画が連続する部分もありますが、迷いなくまっすぐ引かれた線は、おつよしけん歐陽詢（五五七～六四一）の《九成宮醴泉銘》のような、初唐の石碑に刻された楷書の文字を彷彿とさせます。

10 邵景康（生卒年不詳）

かいしよずいえんしわごせんめん

《楷書隨園詩話語扇面》

中華民國



小粒の楷書で扇面に書かれた作品です。テキストを九文字と四文字に分割して書き進め、伸びやかな線と安定感のある字形が書き終わりまで一貫しています。柔らかな線でやや縦長の字形は、ぐせいなん虞世南（五五八～六三八）の《孔子廟堂碑》を思わせます。



孫廷翰(？～一九一七)

かいしよりようとふじよごせんめん

## 《楷書両都賦序語扇面》

清時代後期



小粒の楷書で扇面書かれた作品です。直線的で硬く鋭い線や、向かい合う点画が内側に反る「背勢」の字形は、はいせい欧陽詢(五五七～六四一)のおうようじゆん《九成宮醴泉銘》を想起させます。迷いなく引かれた線は、紙面全体に緊張感をもたらしています。

## II. 行書—中国書法の正統派—

行書は、点画を連続させたり、省略したりする書体です。現代では楷書を崩して書いたものと思われがちですが、歴史的には、漢時代(前二〇六～二二〇)に用いられていた書体である隷書を速写するなかで生まれてきたと言われます。

行書の手本として用いられる代表的なものは、東晋時代(三一七～四二〇)の王羲之(三〇三？～三六一?)によって書かれた作品群です。王羲之は「書聖」と呼ばれ、特に唐時代以降、理想とすべき書の古典として、東アジアに存在し続けてきました。

ですが、現在では、王羲之の書で確かなものは残っていないとされています。その書は拓本などの「写し」を通して伝えられてきました。また、歴史の中には元の趙孟頫(一二五四～一三二二)など、王羲之を引き継ぐと評価される書の名人たちがいます。後世の人々は、王羲之の拓本や各時代に存在した名人の書を通して、伝統的な行書を学んできたのです。

ここでは、王羲之や趙孟頫の書に倣う、伝統的な書風の行書作品をご紹介します。流麗な姿の書をお楽しみください。

12 陸潤庠（一八四一～一九一五）

ぎようしよしちごんついれん

### 《行書七言對聯》

中華民國



手描きの模様が入った蝉箋せみせんに七言しちごんの対句ついくを書いた作品です。太

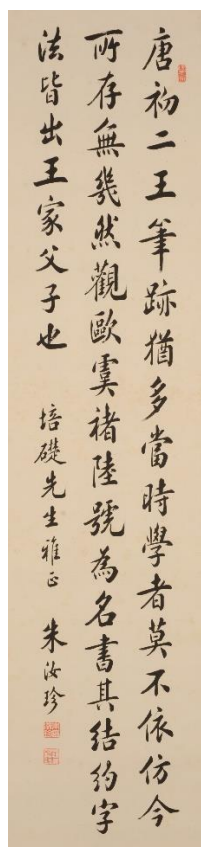
めの墨線には重量感じゆうりようかんがありますが、紙がやややかに加工されているために、筆運びは滑らかです。背景の模様や紙色とも相まって、書かれている文字には流麗りゅうれいな趣おもむきが漂ただよっています。

13 朱汝珍（一八七〇～一九四三）

ぎようしよじく

### 《行書軸》

清時代後期



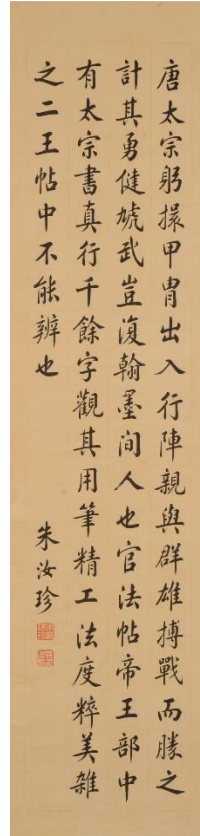
王羲之おうぎし（三〇三？～三六五？）の書法が唐の書家によって引き継がれていることを述べた文章を、端正たんせいな筆致で書いた作品です。所々、点画が連続して書かれる行書体でありながら、直線的な線と安定感の高い字形は楷書体のようでもあります。

14 朱汝珍（一八七〇～一九四三）

ぎようしよじく

《行書軸》

清時代後期



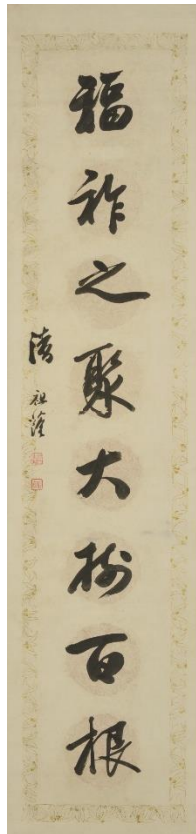
太宗皇帝（五九八～六四九）の書が王羲之（三〇三？～三六五？）と比肩するほど素晴らしいと述べた文章を書いた作品です。自然な肥瘦を伴う墨線と均整のとれた字形を作る書法は、宮廷で用いられた「館閣体」と呼ばれるものでしょう。

15 潘祖蔭（一八三〇～一八九〇）

ぎようしよはちごんついれん

《行書八言對聯》

清時代後期



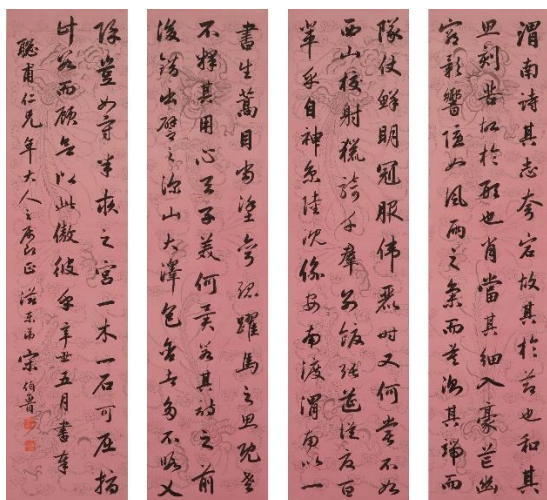
「和氣（縁起の良い氣）は万花が咲き乱れるように、福祚（幸福と財産）は大樹が根を張るように」という意味の語を記した對聯です。やや右肩あがりの字形と肥瘦を伴う墨線によって、文字には堂々とした趣が備わっています。

16 宋伯魯（一八五四～一九三二）

ぎようしよりくほうおうししようじよごしへい

《行書陸放翁詩鈔序語四屏》

清時代末期 光緒二十七年（一九〇二）



陸游（一一二五～一二二〇）の詩を集めた『陸放翁詩鈔』の序

文を、手描きの紋様が入った蠟箋四幅に書いた作品です。終始一貫している鋭く硬い墨線／やや扁平気味の安定感ある字形は、趙孟頫（一二五四～一三二三）の行書作品を彷彿とさせます。

17 趙時樞（一八七四～一九四五）

ぎようしよはちごんついれん

《行書八言對聯》

中華民國



「六欲をなくせば仏になれる、汚れないことが幸福なことである」という意味の語を記した対聯です。行書と草書の文字が、真つ赤な紙に太く重量感のある墨線で書かれています。文字の大きさに自然な大小があり、紙面には微妙な変化が生じています。

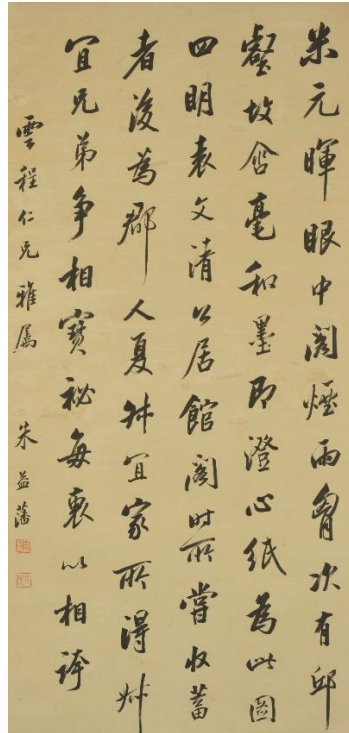


18 朱益藩しゅえきはん（一八六一〜一九三七）

ぎようしよじく

《行書軸》

清時代末期〜中華民国初期頃



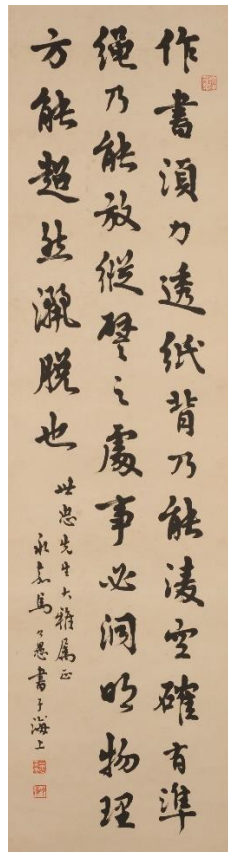
米友仁（一〇七二〜一一五二）の絵画に関する文章を行書で書いた作品です。勢いよく筆を運び、右肩上がりや堂々とした文字で書かれています。四行目「群」の最終画を長く伸ばす部分などは、米芾（一〇五一〜一一〇七）などの宋時代の書を想起させます。

19 馬公愚まこうう（一八九〇〜一九六八）

ぎようしよじく

《行書軸》

清時代末期〜中華民国初期頃



「紙の裏にまで墨が入るように文字を書く方が良い」等、書に関する文を記した作品です。座右に置いて書を制作するにふさわしい文言が記されています。本紙に書かれた文言を体現するかのような厚みのある線で書かれた力強い書です。

### III. 臨書―先人に学ぶ、伝統に挑む―

手本を見て書き写すことを「臨書<sup>りんしよ</sup>」と言います。ここでは、近代中国の書家たちによる臨書作品を紹介します。

臨書では、手本の形をそっくりに写すことだけでなく、手本が持っている筆の勢いや雰囲気<sup>ふんいき</sup>を写すことも行われます。書家によって、写そうとするものは様々です。たとえば同じ手本であっても、書家が異なれば、同じ臨書作品になることはありません。

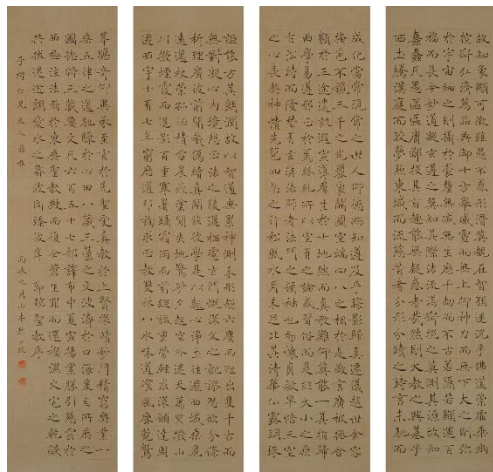
ここでは、あらゆる書体の臨書作品をご覧くださいます。書家たちがどのように古典と向き合い、先人に学んでいるのか、さらには中国書法の伝統にどのように挑んでいるのかをご覧ください。

### 20 趙世駿（？～一九二七）

かいしよりんがんとうししょうぎようじよしへい

### 《楷書臨雁塔聖教序四屏》

中華民國五年（一九一六）



ちよすいりよう  
褚遂良（五九六～六五八）の《雁塔聖教序》を臨書した作品

です。細くしなやかな線質は、石碑に刻された褚遂良の文字を忠実に再現しています。筆先<sup>たく</sup>を巧みに用いて軽快な線<sup>けいかい</sup>を引いており、勢いよく動いた筆先は、時にくるりと回って線を結ぶこともあります。



21 伊立勲（一八五六～一九四二）

りんしよしへい

《臨書四屏》

中華民國二六年（一九二七）



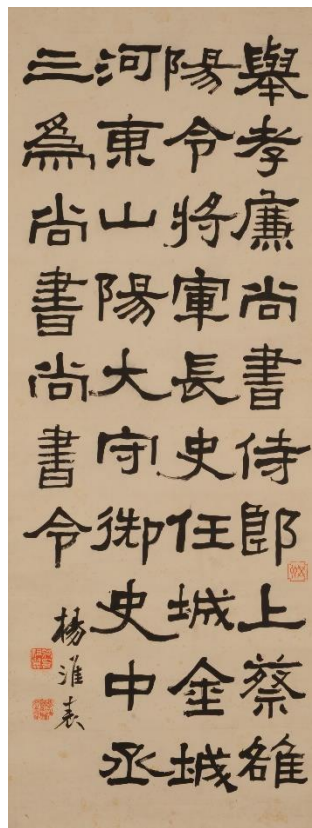
隸書／篆書／楷書／草書の作品を臨書した四幅の作品です。文字の大きさや線質に大きな変化はつけず、一定の調子で最後まで書き上げています。作者があらゆる書体を自在に書きこなす技量を持っていることを示す作品です。

22 張祖翼（一八四九～一九一七）

れいしよりんようわいひようきじく

《隸書臨楊淮表紀軸》

清時代末期 光緒二九年（一九〇三）



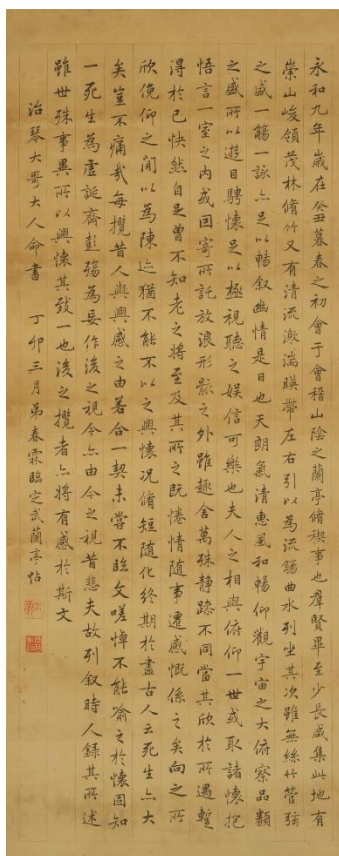
後漢時代（二五～二二〇）の石碑《楊淮表紀》を臨書した作品です。扁平な字形と波打つようなハライ（波磔）は後漢に刻された隸書の姿をよく再現しています。線には、毛筆ならではの潤渇がよく出ており、独特の躍動感を伴っています。

2 3 劉春霖（一八七二～一九四二）

ぎようしよりんていぶらんていじよく

《行書臨定武蘭亭序軸》

中華民國二六年（一九二七）



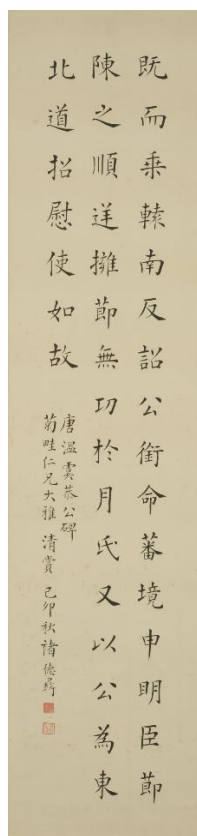
王羲之（三〇三？～三六五？）の代表作《蘭亭序》を臨書した作品です。均整の取れた小さめの文字を、ブレのない線で書き写しています。潤渇と濃淡の少ない墨線は、やや硬さを感じさせるものです。これは、筆者が手本としていた《蘭亭序》の影響かもしれません。

2 4 褚德彝（一八七一～一九四二）

かいしよりんおんげんはくひじく

《楷書臨温彦博碑軸》

中華民國二八年（一九三九）



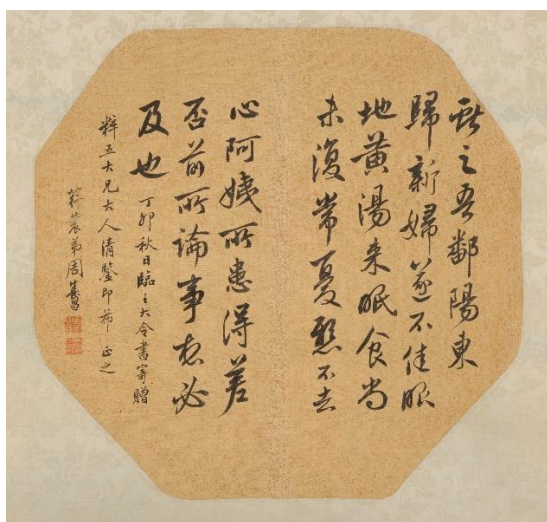
歐陽詢（五五七～六四一）の《温彦博碑》を臨書した作品です。細く鋭い線質は、毛筆で書かれたものでありながら、石碑に鑿で刻みこんだ文字の姿を彷彿とさせます。字間／行間を大きく空けて文字を配置し、各文字が堂々とした存在感を示しています。

25 周寿昌（一八一四～一八八四）

ぎようしよりんおうけんしだんせん

《行書臨王献之团扇》

清時代後期 同治六年（一八六七）



おうぎし 王羲之（三〇三？～三六五？）の子・王献之（三四四～三八八）

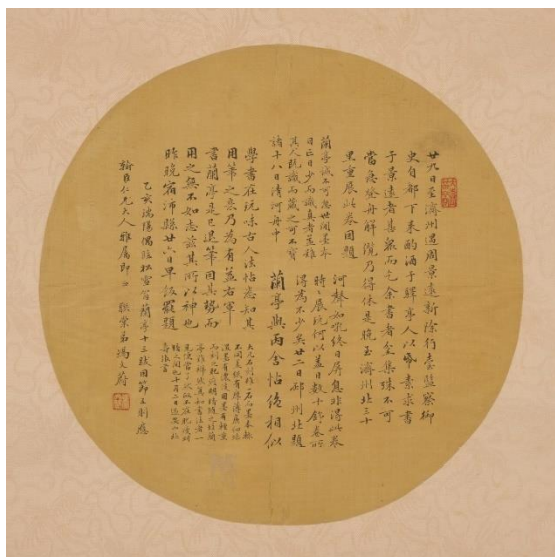
の書を臨書した作品です。勢いよく引かれた線が紙面全体に躍動感を与えています。時折、筆先を巧みに用いて細身の線を用いており、紙面が単調にならないようにまとめています。

26 馮文蔚（一八四一～一八九六）

ぎようしよりんらんていじゆうさんぼつだんせん

《行書臨蘭亭十三跋团扇》

清時代後期 光緒元年（一八七五）



《蘭亭十三跋》は、元時代の趙孟頫（一二五四～一三二三）が

独孤長老から譲り受けた拓本《蘭亭序》に一三種の跋文を書き、さらに《蘭亭序》を臨書したものです。本作は、原本よりも小さな文字で臨書しており、繊細な線が見どころの逸品です。

## 第二部 日本の書

観峰館が収蔵している日本の書画は百点ほどです。中国の書画を約二万点収蔵していることに比すれば少ないものの、この中には、江戸時代から近代日本の著名な書家による作品が含まれています。

また、肉筆ではありませんが、書を学ぶための手本として用いられた和本／教科書類の資料を一万冊以上収蔵しています。これらの資料によって、近代の日本人がどのような書を手本として学んできたのかを追うことが出来ます。

これらの資料の中から、本展では、日本の人々が「きれいな字」の手本として用いた教科書や、それらの執筆に携わった日本人書家の作品を中心に展示します。

### I. 江戸から近代へ―漢字書法の展開―

江戸時代まで寺子屋で行われていた文字教育は、明治五年（一八七二）の学制発布以降、学校で行われるものとなっていきます。そこで手本として用いられたのは、中国の書に倣う「唐様」の書でした。

明治以降、中国との交流が盛んになることを背景として、当時の書家たちは江戸時代とは異なる書風を実践していきます。彼らが学んだ中国の漢字書法は、子弟へ直接教授することや、手本として出版することを通して、多くの人々へと伝わっていきました。

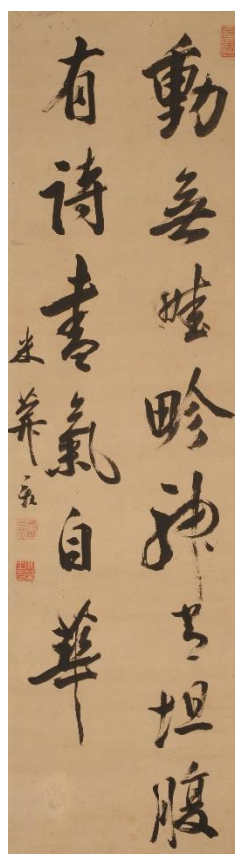
ここでは、江戸時代後期から近代日本で活躍した書家たちの作品を中心に展示いたします。また、これらの作品とあわせて、書の手本として発行された教科書等も展示します。近代以降の日本で、どのような書が学ばれていったのか、その一端をご覧ください。

27 市河米庵（一七七九～一八五八）

ぎようしよしちごんついくじく

《行書七言对句軸》

江戸時代後期



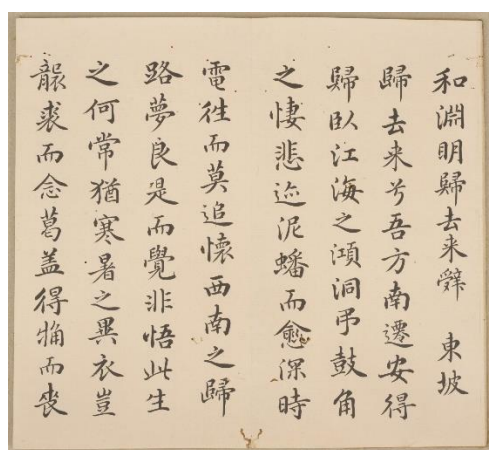
七言二句を行書で書いた作品です。前の句は曾鞏（一〇一九～一〇八三）、後ろの句は蘇軾（一〇三七～一一〇一）の詩から引用しています。線に表れた潤濁の対比が見事で、特にカスレに見られる力強い線質が魅力的です。

28 中沢雪城（一八〇八？～一八六六）

かいしよきぎよらいのじ・しゅうじじゅつしゅじょう

《楷書歸去來辭・集字十首帖》

江戸時代後期 嘉永二年（一八四九）



陶淵明（三六五～四二七）の「歸去來辭」と、そこから字を集めて作った詩を楷書で書いた作品です。柔らかな線とやや扁平の字形は、穏やかな印象を鑑賞者に与えます。本冊の最後には、米芾（一〇五一～一一〇七）の書に倣って書き上げたとの書入れがあり、中国の書への憧れが垣間見えます。

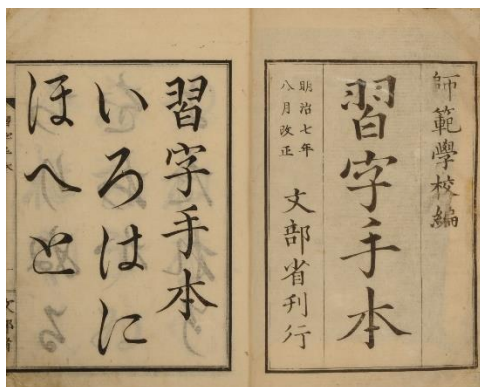


29 師範学校編

しょうがくしゅうじてほん

《小学習字手本》

明治七年（一八七四）



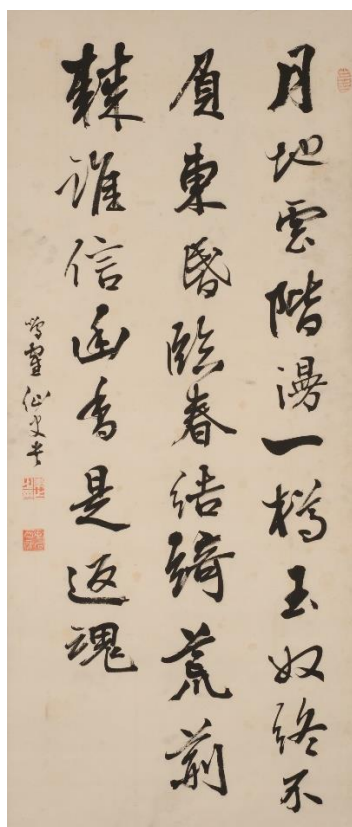
明治五年（一八七二）に学制が公布され、近代的な学校教育制  
度が整備されていく中で、比較的早期に出版された習字の教科書  
です。筆者は不明ですが、細く柔らかな曲線で書かれている「い  
ろは」の手本は、こどもたちが学校で最初に学ぶ書としてふさわ  
しいものだったのでしょう。

30 日下部鳴鶴

ぎょうしよそしよくしじく

《行書蘇軾詩軸》

明治時代中期〜大正時代



蘇軾（一〇三七〜一一〇一）の詩を行書で三行にわたって書い  
た作品です。力強く筆を運んでおり、墨が少なくなつてカスレが  
生じて線は弱くなつていません。起筆やハライに見られる鋭く  
尖った形状は、筆者が中国の石碑に刻された文字をよく学んでい  
ることの表れでしょう。

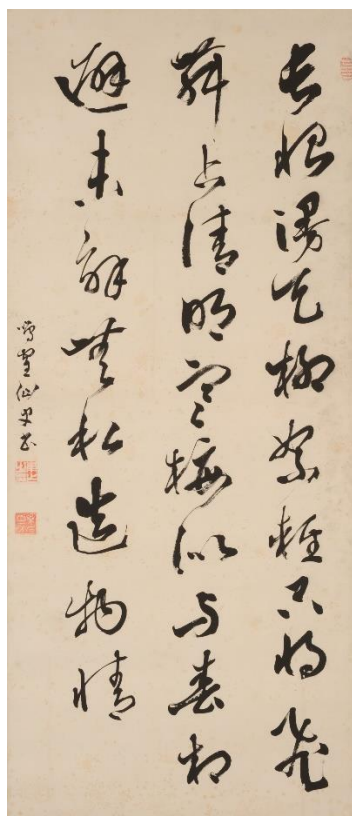


3 1 日下部鳴鶴くさかべめいかく（一八三八～一九二二）

ぎようしよそしよくしじく

《行書蘇軾詩軸》

明治時代中期～大正時代



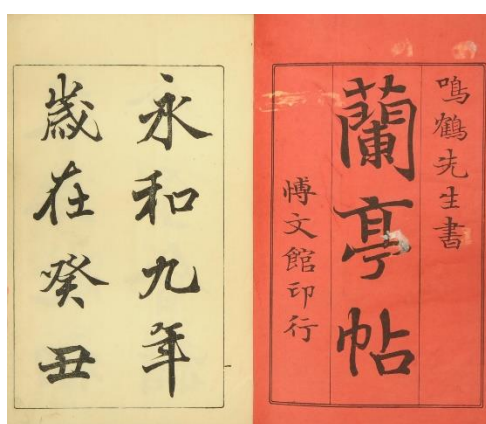
蘇軾そしやく（一〇三七～一一〇一）の詩を行書と草書で三行にわたって書いた作品です。紙に切り込むような鋭い線質で書かれています。文字と文字を繋ぐ連綿線れんめんせんには、筆先で引かれた細い線が見え、筆者がリズムミカルに筆を運ぶ様子が想像されます。墨の入った線の重厚感も見どころの逸品です。

3 2 日下部鳴鶴くさかべめいかく（一八三八～一九二二）

めいかくせんせいりんらんでいじよう

《鳴鶴先生臨蘭亭帖》

明治七年（一八七四）



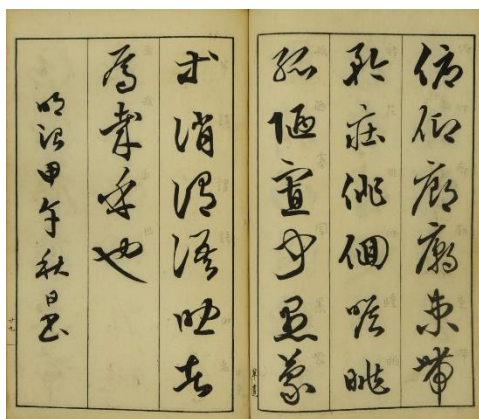
日下部鳴鶴が王羲之わうぎし（三〇三？～三六五？）の《蘭亭序》らんていじよを臨書し、それを書の手本として出版したものです。字形は《蘭亭序》を踏襲してはいますが、鳴鶴独自の鋭く切り込むような線質で臨書しています。ハネやハライに見られる細身の線を再現するには、高い技量が必要になるでしょう。

3 3 日下部鳴鶴くさかべめいかく（一八三八〜一九二二）

そうしよせんじもん

《草書千字文》

明治二七年（一八九四）



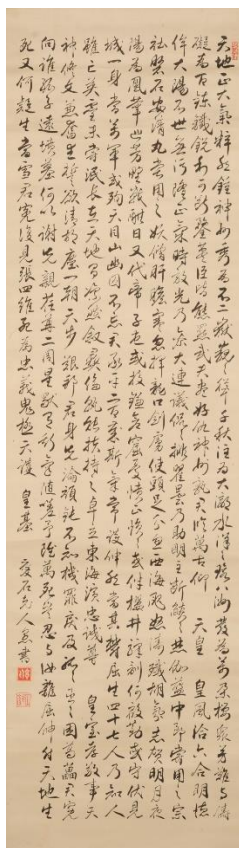
日下部鳴鶴が草書で「千字文」せんじもんを書き、書の手本として出版したものです。それぞれの文字の楷書体が鉛筆で書き加えられており、元の使用者が書き込んだものと思われます。曲線的で柔らかな線と、直線的で硬い線が混じり合い、鳴鶴独特の書風を醸し出しています。

3 4 玉木愛石たまきあいせき（一八五三〜一九二八）

ぎようしよせいきのうたじく

《行書正気歌軸》

大正時代



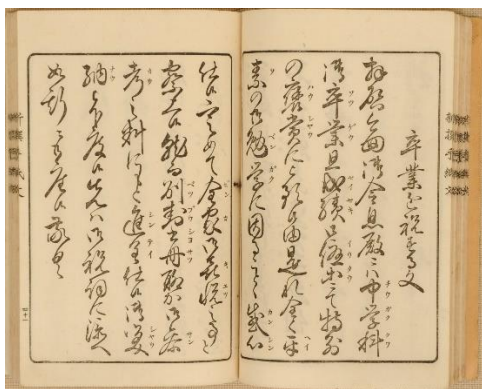
元天祥ぶんでんしょう（一二三六〜一二八二）が作った詩である「正気歌」せいきのうたを藤田東湖ふじたとうこ（一八〇六〜一八五五）が日本風にアレンジした詩「和文天祥正気歌」ぶんでんしょうせいきのうたにわすを行書で書いた作品です。絹に書かれており、独特のカスレが生じています。文字に極端な大小をつけず、最初から最後まで淡々と書きあげています。

3 5 玉木愛石たまきあいせき（一八五三〜一九二八）

しんせんてがみぶん

《新撰手紙文》

大正二年（一九一三）



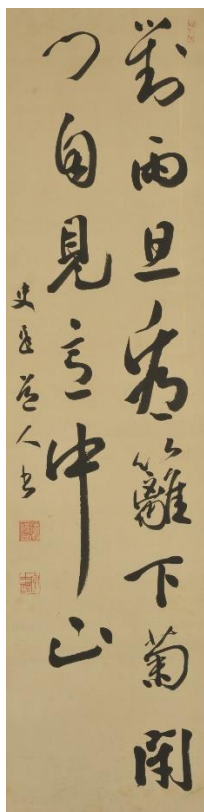
手紙に書く文例と書の手本を兼ね備えた書籍です。序文には、「平易な文章と穏やかな書風」であると記されています。漢字は草書体を多用し、かな文字も連綿線によって続け書きされていますが、文字の大きさには自然な大小があり、紙面全体をまとめています。

3 6 辻本史邑つじもとふし（一八九五〜一九五七）

ぎょうしよしちごんついくじく

《行書七言对句軸》

昭和時代



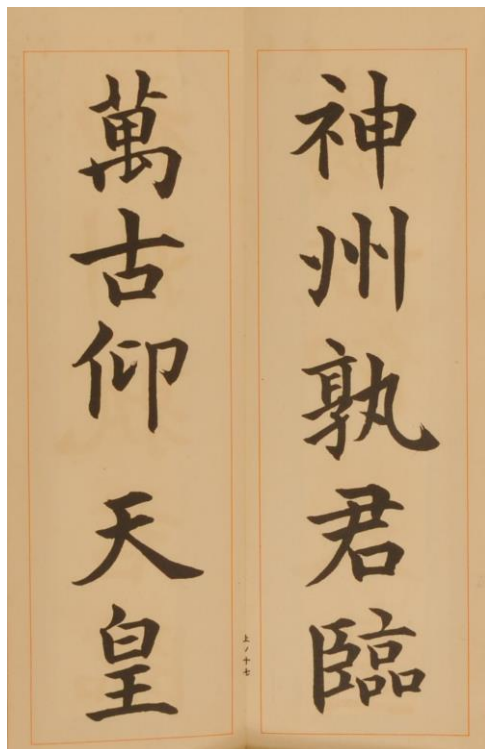
七言しちごん二句にくを行書ぎょうしよと草書そうしよで二行にわたって書いた作品です。「中」の最終画を長く伸ばす等、文字の大きさにはかなりの変化がありますが、カスレの少ない線を用いることで、紙面全体は落ち着いた雰囲気となっています。

37 辻本史邑（一八九五～一九五七）

しんせんちゅうとうてうてならいききょうはん

《新撰中等手習教範（上）》

昭和十一年（一九三六）



旧制中学校で用いられた習字の教科書です。右あがりの横画、

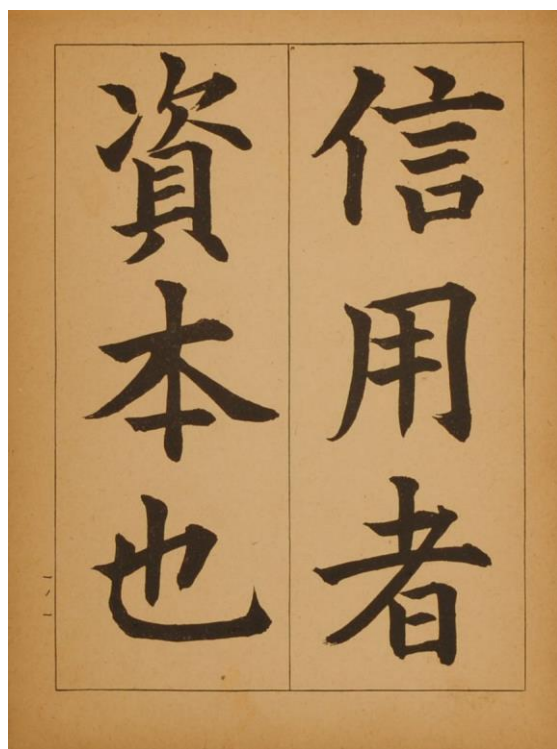
均整のとれた字形、自然な肥瘦を伴う線は、楷書の手本として最適です。手本となっている語句には、日本で自国を誇って言う「神州」や「天皇を敬う」等、戦時中の状況を反映したものが見られます。

38 辻本史邑（一八九五～一九五七）

せいねんてならいききょうはん

《青年手習教範（上）》

昭和十三年（一九三八）



青年学校で用いられた習字の教科書です。右あがりの横画、均

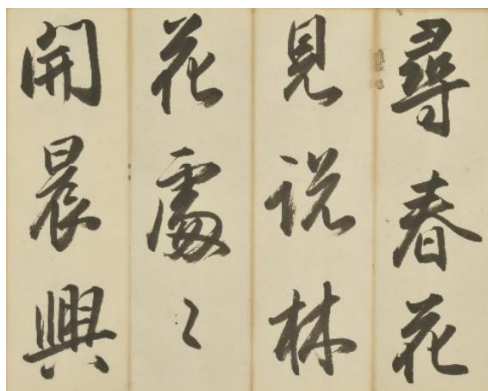
整のとれた字形、自然な肥瘦を伴う線は、唐時代の洗練された楷書の姿を彷彿とさせます。「信用者資本也（信用は資本なり）」等、教訓めいた語が手本として用いられています。

39 辻本史邑（一八九五～一九五七）

りんしよじょう びょうぶどだい

《臨書帖「屏風土代」》

昭和時代



小野道風（八九四～九六六）が屏風の色紙形への揮毫にあたり、

下書き（土代）として書いた作品が《屏風土代》です。本作は、

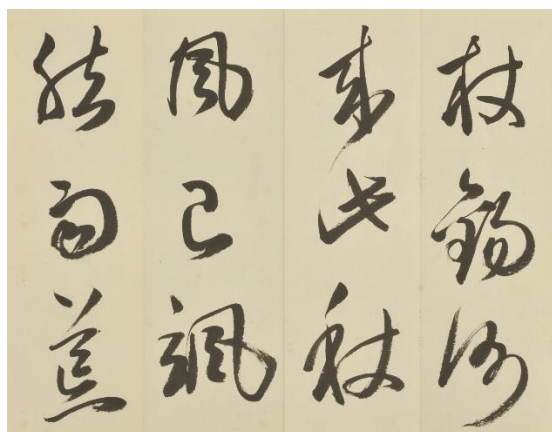
これを辻本史邑が臨書し、弟子へ手本として与えたものになりま  
す。筆を少し傾ける側筆を用いることで、原本《屏風土代》の書  
風を伝えています。

40 辻本史邑（一八九五～一九五七）

りんしよじょう おうたくそうしよ

《臨書帖「王鐸草書」》

昭和時代



中国の明末清初に活躍した書家・王鐸（一五九二～一六五二）

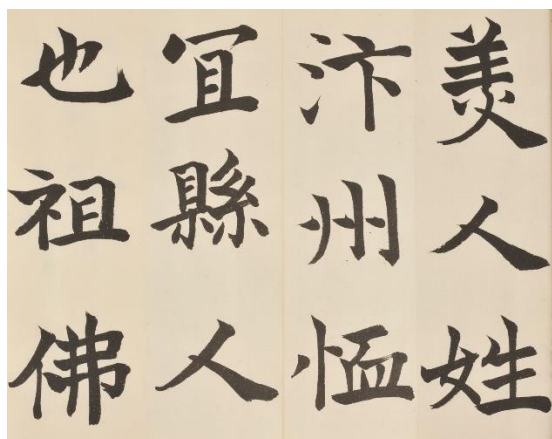
の書を折帖に臨書したものです。辻本史邑が弟子へ手本として  
与えるために臨書したものと思われます。王鐸の草書に見られる  
文字の大小や線の潤渴、躍動感のある字形を伝えています。



41 小坂奇石（一九〇一～一九九二）

りんしよじょう びじんとうしほし

《臨書帖「美人董氏墓誌」》



昭和時代

隋時代・開皇一七年（五九七）に制作された《美人董氏墓誌》を、小坂奇石が弟子へ手本として与えるために臨書した折帖です。鋭く尖った線は、毛筆で書かれたものでありながら、石に刻した文字の姿を想起させます。

II. 近現代の「きれいな字」―仮名の書と習字手本―

中国から伝来した漢字を用いて日本語を表記する方法として、日本人は「かな」を生み出しました。中国の書に倣う漢字書法が学ばれると同時に、和歌や手紙文、あるいは日常の筆記全般の方法として、かな文字の書き方も学ばれています。ここではまず、かなの書や手紙文の手本などを紹介します。

近代以降、鉛筆やペンなどの硬筆が主要な筆記具となったため、毛筆で文字を書く機会は減少していきました。さらに現代では、文字は「書く」ものから「打つ」ものへと変容を遂げつつあります。その一方、「文字をきれいに書きたい」「文字を書くことが楽しい」という人も少なくありません。これらの需要に応えているのが、習字教室や書道教育に携わる人々です。

本展の最後に、戦後の日本で習字の通信教育を展開し、その半生を書道教育に尽くした原田観峰（一九一〇～一九九五）の書を取り上げます。「正しい文字・美しい文字」を提唱し、亡くなるまで習字手本を執筆し続けた原田観峰の書をご覧ください。



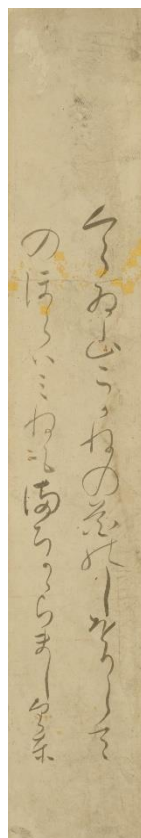
4 2 野村望東（一八〇六～一八六七）

わかたんざく

やま

《和歌短冊「くらゐ山」》

江戸時代後期



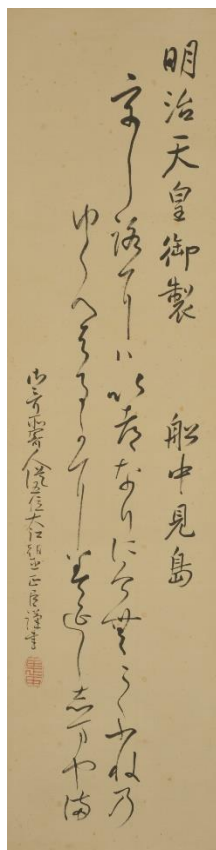
細身の線で和歌を書いた短冊です。一行目に上の句、二行目に下の句が書かれています。墨をつけた部分はやや太くなり、書き進めるにつれて墨が減り、線が痩せてきます。自然な肥瘦が見どころの逸品です。筆先は軽快に回転したり、時にゆらぎながら線が引かれたりしており、見ている者を飽きさせません。

4 3 阪正臣（一八五五～一九三二）

めいじてんのうぎよせいわか せんちゅうにしまをみる

《明治天皇御製和歌「船中見島」》

明治時代～大正時代



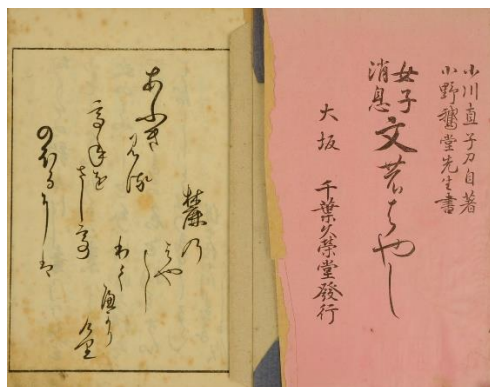
明治天皇（一八五二～一九一二）の詠んだ和歌を書いた作品です。縦長の紙面にあわせるように、「し」や「に（耳）」等の文字が縦長に書かれています。言葉の切れ目と墨継ぎの位置が対応しており、歌のリズムにあわせて筆が運ばれていることが分かります。軽快に引かれた線が見どころの逸品です。

4 4 小野鷺堂（一八六二〜一九二二）

じょしししょうそく ふみ

### 《女子消息「文のはやし」》

明治時代〜大正時代



女子の消息（手紙）文と書の手本として出版された書籍です。

明治から大正にかけて教育家として活躍した小川直子（一八四〇

〜一九一九）が文を作り、小野鷺堂が書いたものになります。「高

い山を登るには麓の林をかき分けていかなければならない」と

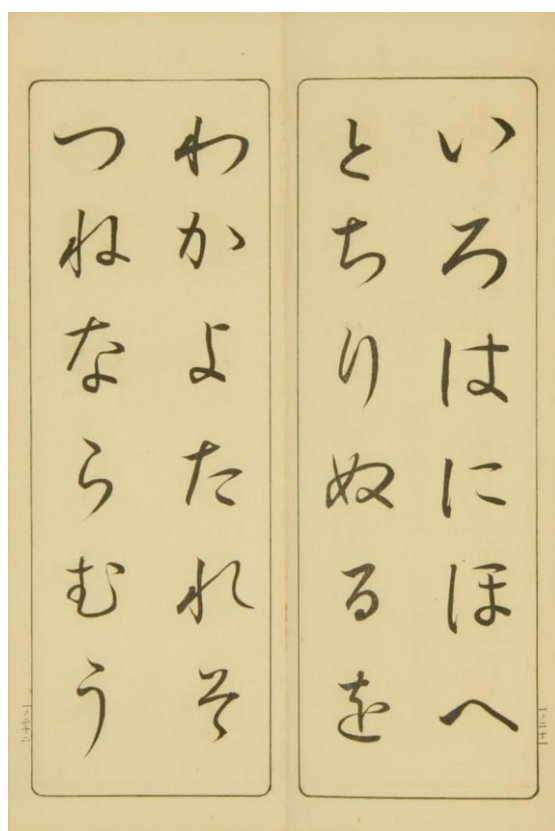
いう意味の和歌が冒頭に掲載されています。

4 5 阪正臣（一八五五〜一九三二）

げんだい じょししゅうじじょう

### 《現代 女子習字帖》

昭和二年（一九二七）



女子の習字手本として出版されたものです。表紙裏には筆の持

ち方、正しい姿勢が挿し絵入りで掲載されています。「いろは」や

和歌などの仮名をはじめとして、多様な習字手本が掲載されてい

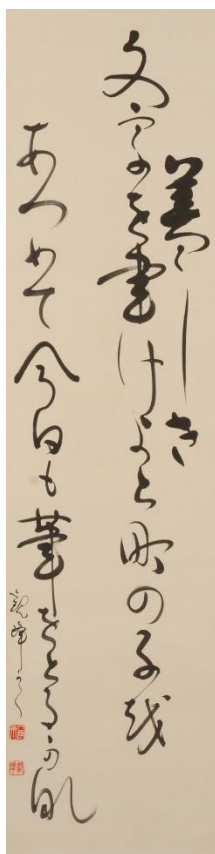
る書籍です。

46 原田観峰（一九二一～一九九五）

うつく もじ じく

《美しき文字軸》

昭和時代



「美しき文字を書けよと町の子を集めて今日も筆をとるかな」という自詠の和歌を書いた作品です。習字教育に半生を尽くした筆者の思いが表れているような言葉です。

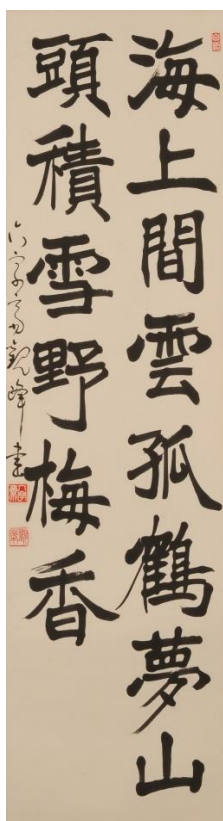
はじめの文字は墨がにじんんでいることから、手本としてではなく、即興的に書かれたものであったのかもしれない。

47 原田観峰（一九二一～一九九五）

かいしよしちごんついくじく

《楷書七言对句軸》

昭和時代



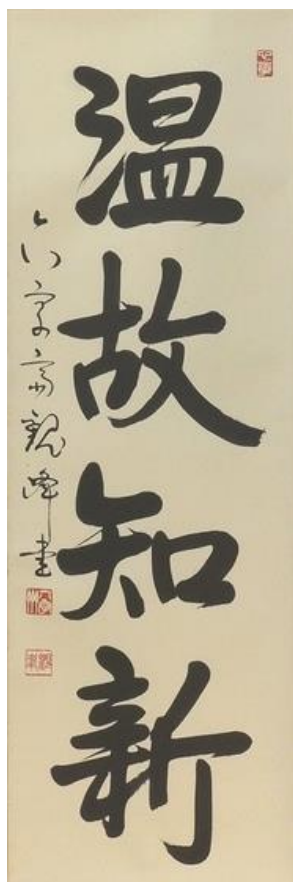
「海上を往き来する雲より孤鶴の夢を偲ばれてくる。山上に積もった雪には梅が咲き香っている」という意味の七言二句を書いた作品です。勢いよく直線的に引かれた線から清々しい印象を受けます。終筆で勢いよく筆を引き抜く筆法は、石碑に刻まれた鋭い文字の姿を想起させるものです。

48 原田観峰（一九一一～一九九五）

おんこちしんじく

《温故知新軸》

昭和時代



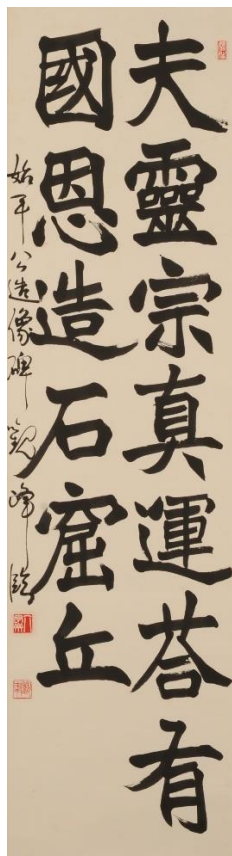
「温故知新」とは「故ふるきを温たずねて新あたらしきを知る」と読み、過去の事実を研究し、そこから新しい知識ちしきや見解けんかいをひらくことを意味します。肥瘦ひせうの少ない柔らかな線と安定感のある字形は、作者が学んできた過去の書から編み出した、習字手本として学びやすい書のかたちであったのかもしれない。

49 原田観峰（一九一一～一九九五）

りんしへいこうぞうぞうきじく

《臨始平公造像記軸》

昭和時代



始平公しへいこうという人物とむらを吊うために仏像を作ったことを記録した石碑「始平公造像記」を臨書りんしよした作品です。鋭く尖った線や三角形のかみになっっている点画は、石に鑿で刻した文字の形を再現したものでしょう。本作に見られる肥瘦ひせうの少ない直線は、観峰が自ら語句を決めて筆を運ぶときにも用いられるものです。

50 陳康侯（一八六六～一九三七）画

原田観峰（一九二一～一九九五）題

かさいず

### 《果菜図》

清時代末期～中華民国初期



中国・揚州ようしゅうの著名な画家である陳康侯が果物や野菜を描いた作品です。絵画の上に、元時代の李溥光りふこう（生卒年不詳）の詩から「おおらかであつても決まりを越えることなく、悠悠ゆうゆう自適じてきに時間を楽しむ」という意味の語句を、観峰が自ら書き入れています。教育者であり、中国書画コレクターでもあった観峰の姿が垣間見えます。

# きれいな字—近代中国と日本の書—

会期：令和4年（2022）7月2日（土）～9月4日（日）

テーマ	作家名（生卒年）	作品名	制作年	目録番号
第1部 近代中国の書				
I. 楷書 —唐の四大家に倣う—	沈衛（1862～1945）	楷書姜夔除夜自石湖帰苕溪詩軸	中華民国12年（1923）	4A-1713
	沈衛（1862～1945）	楷書川官題傲樓壁詩軸	中華民国21年（1932）	4A-1044
	黄自元（1837～1918）	楷書七言対聯	清時代末期～中華民国初期頃	4A-3147
	張百熙（1847～1907）	楷書七言対聯	清時代後期	4A-2652
	華世奎（1863～1941）	楷書十言対聯	清時代末期～中華民国初期頃	4A-3840
	趙世駿（？～1927）	楷書曾幾詩軸	清時代末期～中華民国初期頃	4A-3748
	符鏞（1886～1947）	楷書曾國藩家書句軸	清時代末期～中華民国初期頃	4A-4231
	陳夔龍（1857～1948）	楷書東方朔画賛語軸	中華民国30年（1941）	5A-0297
	劉春霖（1872～1942）	楷書杜甫詩軸	中華民国	5A-0441
	邵景康（生卒年不詳）	楷書随園詩話語扇面	清時代後期	台扇A-065
	孫廷翰（？～1917）	楷書兩都賦序語扇面	清時代後期 光緒10年（1884）	台扇A-108
II. 行書 —中国書法の正統派—	陸潤庠（1841～1915）	行書七言対聯	清時代後期	4A-2375
	朱汝珍（1870～1943）	行書軸	清時代後期	4A-0972
	朱汝珍（1870～1943）	行書軸	清時代後期	4A-0007
	潘祖蔭（1830～1890）	行書八言対聯	清時代後期	4A-1425
	宋伯魯（1854～1932）	行書陸放翁詩鈔序語四屏	清時代末期 光緒27年（1901）	4A-3671
	趙時桐（1874～1945）	行書八言対聯	中華民国	4A-2087
	朱益藩（1861～1937）	行書軸	清時代末期～中華民国初期頃	4A-2603
	馬公愚（1890～1968）	行書軸	中華民国	4A-1500
III. 臨書 —先人に学ぶ、伝統に挑む—	趙世駿（？～1927）	楷書臨雁塔聖教序四屏	中華民国5年（1916）	4A-0569
	伊立勳（1856～1942）	臨書四屏	中華民国16年（1927）	4A-0090
	張祖翼（1849～1917）	隸書臨楊淮表紀軸	清時代末期 光緒29年（1903）	4A-1218
	劉春霖（1872～1942）	行書臨定武蘭亭序軸	中華民国16年（1927）	4A-1681
	褚德彝（1871～1942）	楷書臨温彦博碑軸	中華民国28年（1939）	4A-3712
	周寿昌（1814～1884）	行書臨王献之团扇	清時代後期 同治6年（1867）	z4a-0203-1
	馮文蔚（1841～1896）	行書臨蘭亭十三跋团扇	清時代後期 光緒元年（1875）	1F-0091-1



第2部 日本の書						
27	I. 江戸から近代へ —漢字書法の展開—	市河米庵 (1779~1858)	行書七言対句軸	江戸時代後期	日-書-103	
28		中沢雪城 (1808?~1866)	楷書帰去来辞・集字十首帖	江戸時代後期 嘉永2年 (1849)	日-書-138	
29		師範学校 編	小学習字手本	明治7年 (1874)	KSY-0011	
30		日下部鳴鶴 (1838~1922)	行書蘇軾詩軸	明治時代中期~大正時代	日-書-019	
31		日下部鳴鶴 (1838~1922)	行書蘇軾詩軸	明治時代中期~大正時代	日-書-118	
32		日下部鳴鶴 (1838~1922)	鳴鶴先生臨蘭亭帖	明治時代中期	影-追-048	
33		日下部鳴鶴 (1838~1922)	草書千字文	明治27年 (1894)	KSD-0001	
34		玉木愛石 (1853~1928)	行書正気歌軸	大正時代	日-書-130	
35		玉木愛石 (1853~1928)	新撰手紙文	大正2年 (1913)	KSO-0021	
36		辻本史邑 (1895~1957)	行書七言対句軸	昭和時代	日-書-016	
37		辻本史邑 (1895~1957)	新撰中等手習教範 (上)	昭和11年 (1936)	TKS-0021	
38		辻本史邑 (1895~1957)	青年手習教範	昭和13 (1938)	TKS-0002	
39		辻本史邑 (1895~1957)	臨書帖「屏風土代」	昭和時代	辻-002	
40		辻本史邑 (1895~1957)	臨書帖「王鐸草書」	昭和時代	辻-005	
41		小坂奇石 (1901~1991)	臨書帖「美人董氏墓誌」	昭和51~52年 (1976~1977)	小坂-012	
42		II. 近現代の「きれいな字」 —仮名の書と習字手本—	野村望東 (1806~1867)	和歌短冊「くらゐ山」	江戸時代後期	日-書-102
43			阪正臣 (1855~1931)	明治天皇御製和歌「船中見鳥」	明治時代~大正時代	日-書-101
44			小野鷲堂 (1862~1922)	女子消息 文のはやし	大正元年 (1912)	KOJ-0003
45			阪正臣 (1855~1931)	現代 女子習字帖	昭和2年 (1927)	JSK-0003
46			原田観峰 (1911~1995)	美しき文字軸	昭和時代	軸-029
47	原田観峰 (1911~1995)		楷書七言対句軸	昭和時代	軸-018	
48	原田観峰 (1911~1995)		温故知新軸	昭和時代	軸-012	
49	原田観峰 (1911~1995)		臨始平公造像記軸	昭和時代	軸-030	
50	参考展示	陳康侯 (1866~1937)	果菜図	清時代末期~中華民国初期	4a-3602	

**夏季企画展「きれいな字—近代中国と日本の書—」出品リスト**  
**編集**  
 公益財団法人日本習字教育財団 観峰館  
 所在地  
 〒529-1421滋賀県東近江市五個荘竜田町136  
 TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475  
<https://kampokan.com/>